

【入選】

当たり前の水の大切さ

岩沼市立岩沼中学校

二年 芝原優太

富士山は静岡県と山梨県が誇る日本一の高さの山だ。僕が小さな頃住んでいた静岡県の祖父母の家は富士山のふもととも言える場所だったため、とても景色が良く、家を出るとすぐに大きな富士山が見えた。

その祖父母の家に久しぶりに帰り、喉がかわき、水道水の水を飲んだ。とてもおいしかった。それもそのはず。その水は富士山からの水だったのである。こんなにおいしい水道水を飲んだことがない。僕はそのおいしさに心から感動した。

日本に住む私たちが飲んでいる水はとてもおいしい。このおいしさを、自分も含めて日本人は忘れているのではないか。

そこで、日本とアフリカの水道水の違いについて比較してみた。日本では水道水ができるまでにいろいろな工夫を施し、誰が飲んでも害がないような水をつくっている。つまり安全な水だ。だが、アフリカの地域の水道水を飲むと、危険であったり、飲むことにも注意が必要だったりするそうだ。そもそも水道水をそのまま飲める国は世界でも十数カ国しかないらしい。その理由の一つとして挙げられるのがインフラだ。要するに施設や水道管が十分に整っていないのである。

先ほど日本の水道水は安全であると記したが、そんな日本でも、ひと昔前までは水はとても汚れていたのである。

一八八七年。横浜市で初めて水道水が供給された。その当時は水を濾過し、圧力をかけていただけだったため、当然のことながら赤痢などの水系感染症の被害が広がってしまった。これをきっかけに日本の水道インフラ整備が始まった。その後も生活水準の向上による水の需要に対応するべく

急速に発展した。一九五〇年に二十七パーセントだった水道普及率が八十年には九十パーセントを超えたのである。

単に「水」と言っても私たちが使う水は水道水だけではない。さらに、水というのは人間の身体の七割を占めている。だが、そんな日常的な、そして、生きるために不可欠な「水」が不足しているという話を耳にした。

具体的に言うと、国連食糧農業機関では二〇二五年までには全人口の三分の二が水不足に陥る可能性があるとして示しているのである。ここで僕は考えた。水がなくなると水道水どころの話ではない。生命に大きな危険が生じるということを。そもそもの話、この問題の原因の一つが世界的な人口増加に伴った大量の食物生産だ。世界では人口が今もなお増え続けていて、増えるにつれて必要となる食料も増加していく。その食料の大半は作物を示しており、その作物をつくるのに多くの水が必要になってくるのである。この問題を解決するためと言って人口増加を制限するわけにもいかない。となると、やはり使用する水の量を減少させるしかないのである。そのためにはどうすればよいのか。農業のことは自分もよく分からないが、どのみち環境を悪化させず、無駄な水を出さなければ良いはずだ。それは一人ひとりができる節水方法と同じであり、水道水でも、トイレや風呂でも何にでも通用することだと思う。一人ひとりで水をこまめに止めることができるのなら、農業では必要最低限の水を使うことができるはず。一人ひとりが洗濯の方法に工夫を凝らすことができるのなら、農業では水やりの方法にも工夫を凝らすことができるはずだ。僕はいつもできていたことを応用させて行うことを大切にしている。それは誰にでもできるはずだ。

日本の水道水はとても安全だ。そして富士山の水はとてもおいしい。当たり前すぎるくらい素晴らしい日本の水を「当たり前」だと思わず、一滴一滴を大切にこれからも生活していくべきだと僕は考える。